

文教大学大学院言語文化研究科 博士学位授与概要

申請者氏名	シリン ゴワ	報告番号	甲第1号
学位の種類	博士(文学)	学位授与年月日	2018年8月8日
学位論文題目	日本語 実験音声学的観点からみたモンゴル語スヌト方言のアクセント		
	英語 Accent of Su'nid dialect: from the point of view of experimental phonetics		
審査委員	川口 良(主査:本研究科教授)、蔣 垂東(副査:本研究科教授)、加納 陸人(副査:本研究科教授)、鬼山 信行(副査:本研究科教授)、福盛 貴弘(副査:大東文化大学)		

1. 論文内容の要旨

モンゴル系諸語における音声・音韻の研究領域では、アクセントに関する研究が他と比べて圧倒的に遅れている。その理由は、モンゴル系諸語のアクセントが意味の弁別という示差的機能を持たないことにあり、この点で、筆者の母語であるスヌト(Su'nid)方言に関しても研究の状況は同様で、これまでに実験音声学的観点からのアクセントに関する研究は見つかっていない。そこで、本研究では、モンゴル語スヌト方言を対象として、音響音声学的手法を用いた精密な分析によって、モンゴル語のアクセントが強弱アクセントであり、常に第1音節にストレスがあるという従来の説に対する対案を提出することを第1の目的とした。さらに、アクセント研究によって得られる音声学的・言語学的問題点を明らかにすることを第2の目的とした。論文の全体的な構成は、次のとおりである。

第1章「序論」では研究動機及び本研究によって見込まれる研究成果などについて述べた。

第2章「先行研究と問題の所在」では、実験音声学的方法による音声学的アクセントの研究、音韻論的観点からとらえたアクセントの研究、その他の3種類に分けて合わせて8論文について検討し、それぞれの特徴と問題点についてまとめた。

第3章「方法論」では、音声学的アクセントの立場に立つという基本姿勢を示した上で、実験音声学的方法と調査の詳細を述べ、従来の研究者がほとんど触れていなかった高さの要素に注目する理由と意義について論じた。

第4章「実験結果」では、フィールド・ワークによって35名の被験者から得られた総計1673個の音響データを音節ごとに整理して音響解析を行った。最終的に整理された音節ごとの語数は、1音節語13、2音節語25、3音節語19である。言語類型論的に膠着語に属すモンゴル系の諸語では4音節語以上の規模になると大半が複合語となるため、4音節語以上は扱っていない。以上の実験によって、次のパターンを導き出した。1音節語は高く始まるH,HLの2パターン、2音節語は低く始まるL_H,L_HL,LH_H,LH_HLと高く始まるH_Lの合計5パターン、3音節語は低く始まるL_H_H,L_H_HLの2パターンがある。

第5章「考察」では、上記の結果をもたらず要因を分析し、ピッチパターンを支配するパラメータとして、(1)音節数、(2)音節の種類(長/重母音=L、短母音=S)、(3)音節構造(開音節=O、閉音節=C)の3種が重要な働きをしていることを示した。以上の諸点を踏まえた最終的な結論は、次のとおりである。

・1音節語の音調パターン 閉音節...H 開音節...HL

・2音節語の音調パターン

(1) デフォルトは低く始まるパターンであり、高く始まるパターンは第2音節に弱化母音を有する例外的な語に限る傾向がある。

(2) 下降音調HLは、第2音節の長音節に生じる傾向がある。

(3)上昇音調 LH は、第 1 音節の長音節に生じる傾向がある。

(4)高平ら音調 H は、例外的な上記(1)を除くと第 2 音節の閉音節に生じる傾向がある。

(5)低平ら音調 L は、例外的な上記(1)を除くと第 1 音節の短音節に生じる傾向がある。

・ 3 音節語の音調パターン

(1)第 1 音節は、音節の長さ、構造と無関係に L になる傾向がある。

(2)第 2 音節は、音節の長さ、構造と無関係に H になる傾向がある。

(3)第 3 音節は、長音節ならば HL、短音節ならば H になる傾向がある。

第 6 章「スヌト方言における弱化母音」では、アクセントと深くかかわる第 2 音節以下の母音弱化について論じた。弱化母音に関しては、語の第 1 音節に立つ母音だけが明瞭に調音され、第 2 音節以下ではすべて弱化するという従来説に対する反例を挙げ、弱化母音の音声学的実態について、次の 2 点を明らかにした。①音節構造：開音節で弱化が顕著に見られる。②生起する位置：非頭音節の短母音が原則だが、それにもかかわらず、非頭音節の短母音が閉音節で、さらにピッチがかかると「中強母音」となり、弱化はおこなわれない。さらに、母音弱化とアクセントに共通する視点として、第 1 音節がすべての権限を握るとするきわめて統率力の強い原理原則を付与することによって、理論的にはすっきりとした説明が成り立つというメリットがあったために、永らく従来説が有力視されてきた可能性を指摘した。

第 7 章では、これまでの実験結果から得られたアクセント分析に関する諸問題について論じている。第 1 に、アクセント・パタンのゆれを手掛かりとして、通時的に代償延長(compensatory lengthening)がこの方言にもかつて生じたことを推測した。第 2 に、印欧系の諸語や日本語などで明らかにされている後接的パターン(proclitic pattern)がスヌト方言にもあてはまることが分かった。第 3 に、音調が一部で格語尾と密接にかかわっていることを示し、文法論と音声学との緊密な連繫を視野に入れた言語研究が不可欠であることを指摘した。

第 8 章で、総まとめとして「結論と今後の課題」を述べている。従来のアクセント研究ではほとんど見過ごされてきた高さという物理量に着目することによって、スヌト方言のアクセントに関する新たな対案を提出することができたとしてその研究成果をまとめ、今後の課題として、4 音節以上の語についても取り組むこと、アクセントを構成する諸要因として残された「強さ」「長さ」「音質」とアクセント・パターンとの関係を検討すること、分節音とプロソディーとの関係について探求を続けること、などを挙げている。

なお、別冊付録として、実際に解析を行った 1673 個の音響解析図が 1 音節語、2 音節語、3 音節語の 3 冊に分けて提出されている。

本稿の中核をなす部分は、2016 年 9 月 2 日に室蘭工業大学にて開催された日本実験言語学会第 9 回大会において口頭発表し、その後査読を経て 2017 年 3 月 24 日に刊行された学会誌『実験音声学・言語学研究』第 9 号(pp.155-184)に「モンゴル語スヌト方言における音声学的アクセントの研究—実験音声学的アプローチ—」と題して掲載された論文に基づく。また、第 6 章「スヌト方言における弱化母音」は、2017 年 3 月 31 日に発行された本学大学院言語文化研究科の紀要『言語文化研究紀要』第 3 号(pp.51-73)に、「モンゴル語スヌト方言に見られる弱化母音—音響音声学的研究—」と題して掲載された論文が加筆修正されたものである。

2. 審査結果の要旨

アルタイ諸語の音声学的研究の歴史は浅く、これまでに明らかにされてきたのはトルコ語までである。特に、モンゴル系諸語ではアクセントは非示差的であり、音韻論的観点からは対立的価値がないために、これまでほとんど研究者の興味を引かなかった。モンゴル系諸語の中ではハルハ方言、チャハル方言が着手されているが、スヌト方言は未開拓の部分であり、先行研究もほとんどなく、参考にできる文献もきわめて少ない。

したがって、筆者の母語とするスヌト方言を対象として、そのアクセントの特徴を明らかにするために実験音声学的アプローチを試みた本研究は、学位申請論文に求められる新規性という点から、研究意義の大きいものと言える。また、上述した当該分野の現状において、35名という多人数による1,673個の音響データを、機器を操作し解析していく作業は、手探り状態であったことが推測される。そのような困難かつ難解なピッチ抽出をやり遂げ、モンゴル語のアクセントが強弱アクセントで常に第1音節にストレスがあるという従来の説に対する対案を提出した本研究は、高く評価されるものと判断する。

まず、第1章「序論」において、スヌト方言の音韻体系について母音と子音に分けて概説された点は、中間論文の不足点を補完するものと言える。また、第2章「先行研究と問題の所在」において、「実験音声学的方法による音声学的アクセントの研究」、「音韻論的観点からとらえたアクセントの研究」、「その他」の3つの観点から先行研究を検討し、8論文についてそれぞれを位置づけ、丁寧に分析し、問題の所在を明らかにした。数少ない当該分野の先行研究について、視座を広げて文献を収集し、整理した努力が認められる。第3章「方法論」では、実験装置、実験手順について詳細に論じて、再現性の保証される妥当な実験であることが示されている。

以上の研究手順を踏まえ、第4章「実験結果」では、1音節語は高く始まる H, HL の2パターン、2音節語は低く始まる L_H, L_HL, LH_H, LH_HL と高く始まる H_L の合計5パターン、3音節語は低く始まる L_H_H, L_H_HL の2パターンがあるという結論を導き出し、第5章「考察」では、そのピッチパターンを支配するパラメータとして、(1)音節数、(2)音節の種類、(3)音節構造の3種が重要な働きをしていることを示した。さらに、第6章「スヌト方言における弱母音」では、アクセントと深くかかわる第2音節以下の母音弱化の音声学の実態について明らかにしている。加えて、第7章「アクセント分析に関連する諸問題」では、これまでの実験結果から得られたアクセント分析に関する諸問題について、スヌト方言にも通時的に代償延長が生じたこと、後接的パターンがスヌト方言にもあてはまること、音調が一部で格語尾と密接にかかわっていることを論じており、副産物的な研究成果についても言及し、論考がなされている。

以上のことから、本研究が導き出した結論を、粗削りながらも妥当な手順を踏んだ研究成果として認め、モンゴル語のアクセントが強弱アクセントで常に第1音節にストレスがあるという従来の説に対する対案を提出し、アクセント研究によって得られる音声学的・言語学の問題点を明らかにするという2つの研究目的を達成していると考えられる。

ただし、各章において、次のような不足点も指摘された。

第1章「序論」では、モンゴル語の方言分類に関する記述には地理的な位置関係を示す地図が不可欠であるが、その掲載がない。また、烏力吉布仁(2001)の中国語による引用文を日本語としてまとめた記述に、正確ではない部分がある。第2章「先行研究と問題の所在」では、本論文とのかかわりが深いと思われる Ailmaa(2013)(内モンゴル大学修士論文)が入手できなかったことから、さらなる文献調査が求められる。第4章「実験結果」では、1音節語とした語を2音節で調音したり2音節語とした語を1音節で調音したりする「ゆれ」に関して、まず、音響データによって説明すべき論点であるが、それがなされずに「中期モンゴル語の音的特徴の反映」という通時的観点からの説明に終始している。第7章「アクセント分析に関連する諸問題」では、代償延長の分析において、音変化の要因を「異化 dissimilation」の点から説明しているが、他にアクセントの弱化という要因も考

慮して再検討するのが望ましい。第 8 章「結語および今後の課題」では、8.1「結語」に示された「弱化母音と第 1 音節 stress 説との関連性」は、本研究によって明らかにされたことではなく、筆者の推測的な意見である。最後に、資料編として提出された別冊付録 3 冊の音響解析図にも、目次が必要である。

今後は、調査語彙に関してさらに検討し、調査対象とする語彙数を増やすことによって本論文の精度を高め、「強さ」「長さ」「音質」という「高さ」以外のアクセント要因についても検討を加えて、モンゴル語スヌト方言のアクセントの全容を解明することが期待される。

以上のような不足点や課題も残るが、本審査委員会としては、本研究がスヌト方言という、当該分野においては未開拓の言語に踏み込み、一定の研究成果を導き出したものと認め、その研究意義を評価し、博士学位を授与するに値する論文であると判定した。